学生の主体的探究活動の実現を図る授業づくり
－恩物の教材研究を中心に－

余公　裕次

A Study of Classes That Enable Students to Engage in Student-Centered activities: Focusing on Teaching Materials Research about Fröbel's 'Gabe'

Yokoh Yuji

Abstracts

Nowadays, college students who major in early childhood education knows Fröbel’s 'Gabe'. Nevertheless, the majority has no experience of touching the actual toys or examining them specifically. In this study, the researcher has attempted students to notice the possibilities of how toys can be used, and problems as teaching materials. The class contained studying literature and actually operating the real objects. As a result, students were able to understand the connection between the first 'Gabe' and the tenth 'Gabe'. In this paper, the researcher described the characteristic of Fröbel’s 'Gabe' and findings that college students realized. Based on the issues that they found in this active learning, the researcher investigated how Fröbel’s 'Gabe' is applicable to today’s childcare.

Keywords: 主体的な探究活動 student-centered research activity, 恩物 Fröbel's 'Gabe',

１．はじめに

本稿は、幼児教育養成課程における講義・演習科目の授業を受講する学生が、積極的に操作活動や調査活動を行う方途として、恩物の教材研究を取り入れた授業実践の成果と課題を整理した論考である。

筆者は勤務校において、主に２年次生を対象とした「保育の計画と評価」（本学の科目名「保育・教育課程論」）の講義科目を担当している。カリキュラムの基礎理論の講義においては、幼児教育のカリキュラムに関する日本内外の歴史を取り扱う。世界初の幼稚園の創始者であるドイツのフレーベル（Fröbel,F.W.A.,1782-1852 年）及び彼の考案した「恩物」（Gabe）は必ず紹介すると共に、我が国の幼稚園の嚆矢とされる東京女子師範学校附属幼稚園においてのフレーベル主義の幼児教育を施した経緯についても取り扱う。学生は他の教職課程科目（保育原理、教育原理など）でもフレーベルや恩物についても学んでいる。このことは本学の学生に限ったことではなく、多くの養成校で学ぶ学生と教授内容に共通していることが想定される。しかし、その高い知名度に相反し、恩物の実物を見たり実際に触れたりしたことのある学生はほとんどいない。教科書の絵図や教職担当教員による画像等で確認する程度である。

フレーベルの恩物は、第一恩物から第二十恩物までの手技として考案されたものである。第十一恩物から第二十恩物までは「穴開け」や「仕事」「お絵描き」といった手技活動を指しており、玩具としての恩物は第一恩物から第十恩物までの十種類である。この十種類については現在も市販されており入手可能である。ただし、恩物を備えている園は僅少であり、筆者が実習や研究会等で訪問

する園で恩物を見かけることはほとんどない。その理由としては、次のようなことが予想される。①明治期から大正期に掛けて、恩物による保育法が「形式的な操作主義」として批判されるようになった経緯があり、恩物を用いた保育は「遊び」を中心とした今日的な保育とは相容れないものであるという認識が浸透していること。②（①に関連して）活動の仕方（遊び方）があらかじめ示されていて、その通りに活動させないといけないという保育方法観が、やはり今日的な「遊び」を中心とした保育方法観と相容れないものであると認識されること。③モンテッソーリ教育の「お仕事」にみられるような、自分で課題を立てて「読む」「書く」などの活動に発展させにくいと考えられていること。④十種類を１セットずつ購入する場合でもやや高額になり、簡単に購入できる価格ではないこと、等が考えられる。

今回の実践では、上記の批判的な内容も踏まえ、学生には恩物の価値や教材としての可能性とともに、課題や問題点といった面から批判的に思考することも重視すべきであると考えた。

恩物に関する研究は数多くなされているが、その多くは、日本の幼児教育の草創期や戦前時期に関する歴史的なアプローチによる論考が多く(1)、フレーベル主義幼稚園等による実践事例以外に恩物の今日的価値を論じたものは管見する限り見当たらない。

本学は開学以来キリスト教を「建学の精神」とし、すべての学生が学内で「キリスト教学」の講義や大チャペルにおける「チャペルアワー」及び諸行事等に参加して、その教義に触れたり教義に基づく豊かな情操を養ったりして学びを深めている。フレーベルの恩物も神から幼児に捧げられた贈り物として考案されたものであり、恩物が目指すねらいと本学の目指すものは同じ方向であり、関係が深いと考えられる。本学の学生が恩物で目指した世界観を理解することも意義があると考え、実践することにした。

２．授業実践の構想

筆者が担当する２年次生対象の 2022 年度後期科目「保育・教育課程論（保育の計画と評価）」において、次のようなシラバスを作成し、実践することにした。受講生は 23 名である。

【2022 年度後期 シラバス】　※項目：一部省略

（１） 科目名等：保育・教育課程論　２単位（講義）

（２） 必修・選択について：幼稚園教諭免許必修・保育士資格必修

（３） 開講期・曜日等：２年後期・月曜日７・８時限　※補講日として土・日でも一部実施

（本学の授業時間は「１時限」を 90 分間としている。）

（４） 到達目標

①保育の計画と評価の意義について説明することができる。

②保育・教育課程（全体的な計画）の編成と指導計画の作成について具体的に説明することができる。

③カリキュラム・マネジメントの意義と過程を関係付けて説明することができる。

（５）授業の概要

さまざまな計画を作成しながら教育課程（全体的な計画）と指導計画の関連、立案の手順を学んだ上で、カリキュラム・マネジメントの意義と事例について学ぶ。

（６）アクティブ・ラーニングについて

・グループ活動を仕組むことで，学生自身によるアクティブ・ラーニングを促す。

・ディスカッション等の活性化を図り，学生間の協働による課題発見力・課題解決力の育成，及び価値の共有化を行う。

（７）授業計画（※日程を一部掲載）

第 1 回　オリエンテーション，カリキュラム及び教育課程について

第 2 回　さまざまな教育課程について～幼稚園教育課程，保育所保育課程の歴史を学ぶ

第 3 回　幼稚園の教育課程について
第 4 回　保育所の全体的な計画及び保育課程について
第 5 回　幼稚園・保育所の生活と乳幼児の理解
第 6 回　教育課程・指導計画を考える上で必要なことについて
第 7 回　全体的な計画・指導計画を考える上で必要なことについて
第 8 回　長期の指導計画の作成について

第 9 回	短期の指導計画について	・「恩物」による教材研究①	【11 月 28 日】
第 10 回	〃	・「恩物」による教材研究②	【12 月 5 日】
第 11 回	〃	・プレゼンテーション資料作成	【12 月 10 日】※補講
第 12 回	〃	・発表、ディスカッション	【12 月 12 日】

第 13 回　全体的な計画の編成と指導計画の作成　・指導案について（グループディスカッション）
第 14 回　教育課程・指導計画のＰＤＣＡサイクルについて
第 15 回　小学校との接続と総括
○「架け橋期（接続器）」のカリキュラムについて　・アプローチ／スタートカリキュラム

（８）評価方法及び基準】
○課題（授業への取り組み）：30%　・ワークシート（10），プレゼンテーション（10），課題レポート（10）
○試験：70%

（９）教科書・参考文献　※省略

（10）授業外における学修方法及び時間
○授業中の課題に関連する幼稚園教育要領・保育所保育指針等の部分を読んでおく。120 分
○テキストや配付プリントを用いて復習をする。120 分

一連の追究活動の運用については、「短期の指導計画」のテーマ、即ち週指導計画（週案）や日案（実習時の責任実習）及び一日の主活動（実習時の部分実習）を取り扱うテーマの時期に３週間４回分の授業を充て、教材研究及び発表等を行うことにした。

1)　教材研究の方途

教材研究として、次の２点を重視した。一つ目は、実物に触れ体験的に操作し、子どもの視点で各恩物の特徴や遊び方を考察することである。二つ目は、文献の統一資料として『フレーベルの恩物の理論とその実際』[(2)]を必ず活用することをルールの一つに挙げたことである。ただし、それ以外の情報収集は学生に委ねることにした。同書は初版の発刊以来、既に 60 年近くの歳月が経過しているが、「糎（センチメートル）」などの一部の難解な表記を除き、比較的平易に述べられた書物である。構成は、冒頭の「恩物について」の概要を述べた章に続いて「第一恩物」から「第十恩物」までの各章が統一されたプロットで構成されている。即ち、「a 意義」「b 目的」「c 遊び方順序」「d 注意」という４つの節で構成され、必要に応じて構成や展開の例が図示されている。

2)　発表の手続きについて

筆者（指導者）は当初、発表のプロットを統一するような指示はしなかったが、学生は、『フレーベルの恩物の理論とその実際』を活用することによって発表のプロットを、ア 各恩物の意義、イ 各恩物による保育の目的、ウ 遊び方（構成・展開）の紹介、エ 留意点、オ 各恩物の価値や課題、といったように構成し提示することになった。

発表は、プレゼンテーション（パワーポイントファイル）と発表内容（原稿）を作成し、必要に応じて実物を使って説明するとよいことも伝えた。

3)　教材研究から発表等に至るまでの流れについて

前頁のシラバスに掲げたように、講義の第９回から第 12 回の４回を当該活動に宛てた。

【恩物の保育の可能性・課題を検討する活動計画】

第 9 回　短期の指導計画について：「恩物」による教材研究①　【11 月 28 日】

第 10 回　「恩物」による教材研究②　【12 月 5 日】

第 11 回　プレゼンテーション資料作成【12 月 10 日】※補講

第 12 回　発表、ディスカッション　【12 月 12 日】

※2022 年度後期「保育・教育課程論」

３．追究活動～教材研究の実際

活動を始めるに当たって、受講生（23 名）にどの恩物を対象に教材研究をしたいかを尋ねたところ、強い意思表示をする学生はおらず、筆者（指導者）に委ねるという回答であった。これは、恩物に対する体験や予備知識がないために生じた、無欲に見える反応である。

そこで、２名ないし３名による 10 のグループを編成し、第９回及び第 10 回で文献講読や情報収集、操作活動を行った。

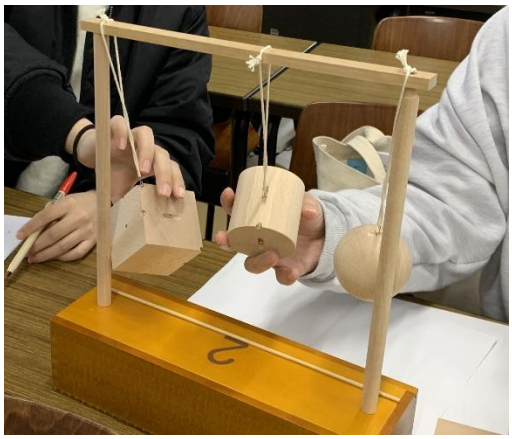


写真１　第二恩物の操作（回転遊び）

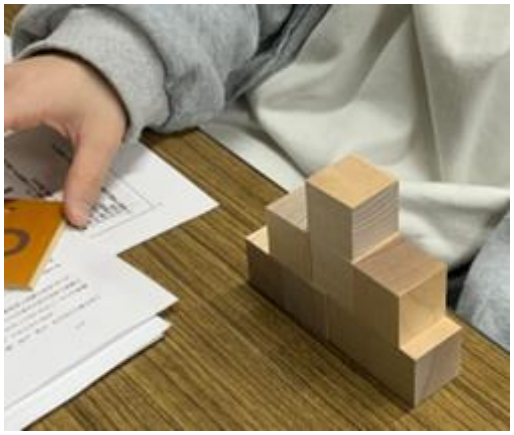


写真２　第三恩物の操作（模様遊び）

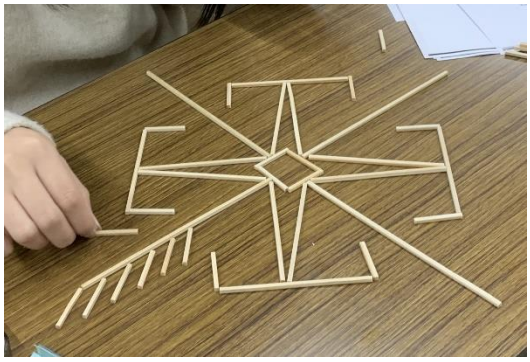


写真３　第八恩物の操作（模様遊び）
※文献資料の「中心模様（例）」の
再現を試みている[3]。

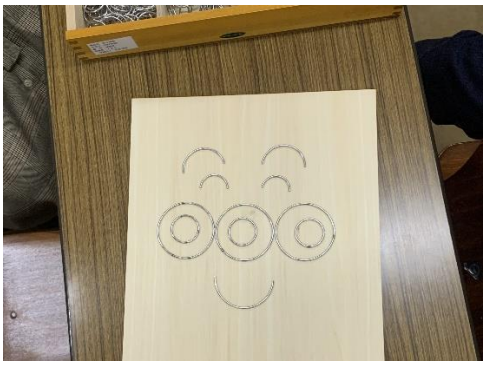


写真４　第九恩物の操作（実物遊び）
※文献資料で環の中心や対称の模様を
作った後に創作したもの。

４．発表・交流及び授業後の手続きについて

1)　スライド資料等の作成・準備

各グループの学生同士がスクリーンにスライド資料を提示して説明する発表形式を確認し、発表する内容（発表原稿）とスライド資料（パワーポイントファイル）を作成した。

図１　第９恩物を担当した学生が作成したスライド資料（抜粋）［※発表者名やフォント、背景等一部変更］

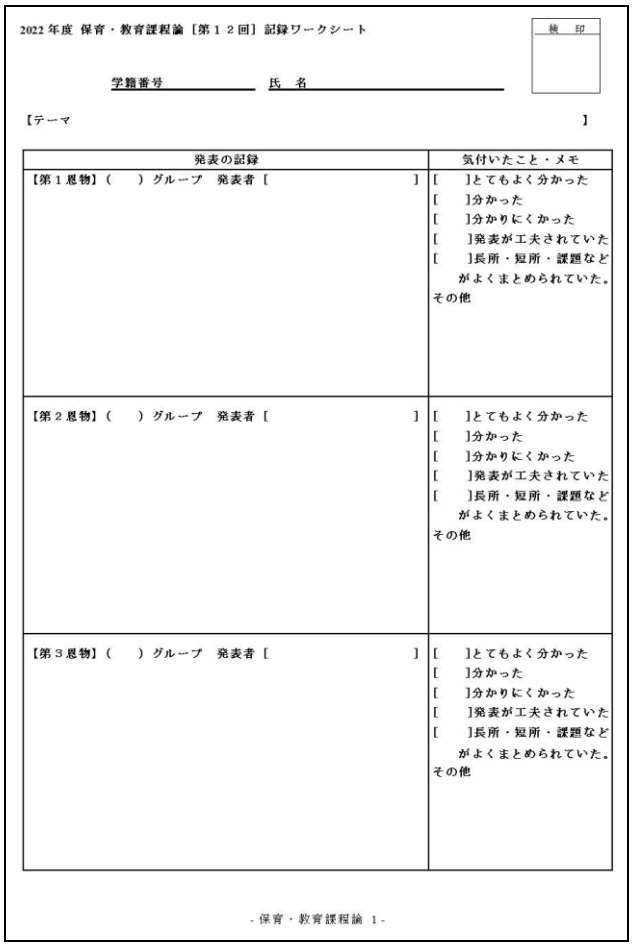
2)　発表・交流の記録や思考の整理の手続き

学生が各グループの発表に基づく恩物の価値や問題について整理できるようにワークシート（A4 版２枚）を配付し、交流や感想（レポート）提出や役立てるための記録用として活用させることにした。（図２参照）

3)　発表・交流

第 12 回の授業で、第１恩物からの順番で、各グループの発表を行った。ただし、学生から発

写真５　実物の操作例等を提示した第一恩物の発表の様子



2022 年度 保育・教育課程論［第１２回］記録ワークシート

検　印

学籍番号＿＿＿＿＿＿　氏　名＿＿＿＿＿＿＿＿

【テーマ　　】

発表の記録	気付いたこと・メモ
【第１恩物】（　　）グループ　発表者［　　］	［　　］とてもよく分かった ［　　］分かった ［　　］分かりにくかった ［　　］発表が工夫されていた ［　　］長所・短所・課題などがよくまとめられていた。 その他
【第２恩物】（　　）グループ　発表者［　　］	［　　］とてもよく分かった ［　　］分かった ［　　］分かりにくかった ［　　］発表が工夫されていた ［　　］長所・短所・課題などがよくまとめられていた。 その他
【第３恩物】（　　）グループ　発表者［　　］	［　　］とてもよく分かった ［　　］分かった ［　　］分かりにくかった ［　　］発表が工夫されていた ［　　］長所・短所・課題などがよくまとめられていた。 その他

- 保育・教育課程論 1 -

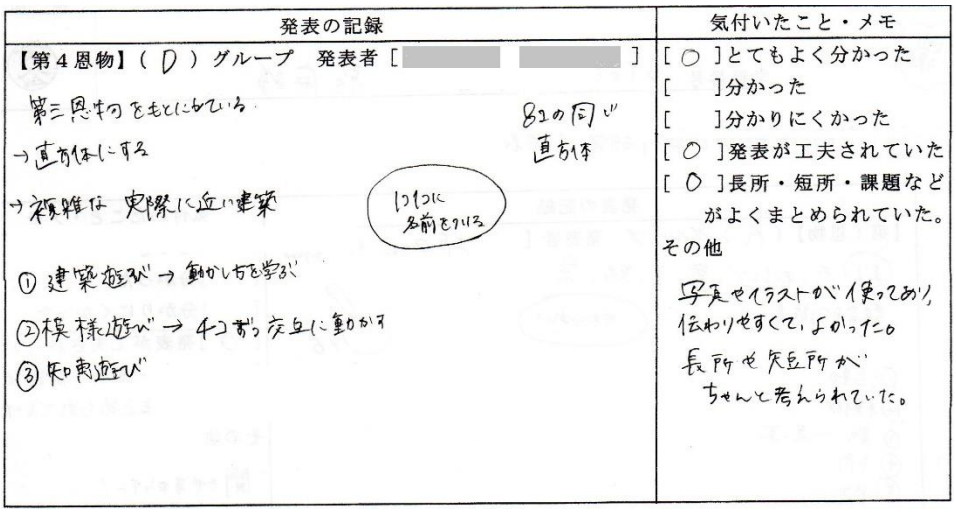
図２　交流・感想に役立てることを位置したワークシート（一部）

表の打ち合わせのために少し時間がほしいという要望を受けたため、よりよい発表のために了承した。スタートの時間を延ばしたことで全体の時間が不足し、一部の発表を第 13 回の授業に持ち越すことになった。

交流については、質疑応答の場を設けたが、用語の意味に対する質問や感想等にとどまった。これは、自分が担当した恩物以外についての知識がほとんどなかったためと考えられる。

4)　発表後の手続き

授業終了後、①ワークシートの提出と②レポートの課題を指示した。レポートについては、「恩物」について調べて発表したことと、他のグループの発表を踏まえ、「恩物について理解したことと課題や問題」を、1200 字以内で本学のポータルサイトからテキスト入力にて提出するように指示した。



発表の記録	気付いたこと・メモ
【第４恩物】（ D ）グループ　発表者 [ ]	[○]とてもよく分かった
第三恩物をもとにしている。	[ ]分かった
→ 直方体にする	[ ]分かりにくかった
→ 複雑な 実際に近い建築	[○]発表が工夫されていた
① 建築遊び → 動かし方を学ぶ	[○]長所・短所・課題などがよくまとめられていた。
② 模様遊び → 4コずつ交互に動かす	その他
③ 知恵遊び	写真やイラストが使ってあり、伝わりやすくて、よかった。長所や短所がちゃんと考えられていた。

8コの同じ直方体

1つ1つに名前をつける

図３　学生のワークシートメモの一部

今回、恩物について調べて発表し、他のグループの発表を聞いて理解したことがいくつかあります。まず一つは、恩物一つ一つに意義や目的がある ということです。今までの講義・演習の中で、丁寧に恩物を見たことはありませんでした。今回一つ一つを見ることができたことで、恩物がどのような発達段階や側面で子どもの発達に影響があるのか、どのように使うとよいのかまで考えることができ、幼児教育の重要さを再認識しました。次に、大人からみても遊んでみたいと思うような魅力があるということです。他のグループの発表を聞いていて、特に第７恩物が私は一番気になりました。理由は、子どもの好きな物が選べる点です。また、私は渡し方や片付け方まで考えられているところがとてもいいなと思いました。子どもたちにとって、片付けの場も大切な学びの場であり遊び感覚で行うことで、整理整頓でさえも楽しく感じてもらえる工夫があることが分かりました。小さな機会も大切にするところが、子どもを教育するということにおいて重要な考え方だと学びました。（省略）

課題や問題点であると感じたところは、大きく二つあります。まず一つは、どんな恩物にもけがや事故の可能性があるということです。第一恩物だけでも、紐の部分が口に入ったり、首にかかったりする。色の好みで揉める可能性がある。毛玉ができていた場合のどに詰まらせてしまう可能性がある、というように、いくつも挙げることができました。また、（省略）毛糸のアレルギーの子どもがある可能性も考えられました。今回、短所や注意点について考えたときに、保育者の一つの視点からだけでなく、園にかかわる様々な立場の職員がそれぞれの視点から考えられる環境があると、もっと子どもの安全を守ることにつながると思いました。特に、誤嚥や誤飲は命に関わるので、園全体で考える機会を持つことが大切だと感じます。（省略）

もう一つは、（省略）木製の素材を生かした恩物が多くありました。それはそれでよいところではあるのですが、視覚的にももっと楽しめる恩物があってもいいのかなと思いました。より好みが現れたり、色を覚えたり、色とその形から想像力を高めたりすることにもつながるのではないかと考えます。　　※傍線は筆者による。

【レポート①～自分が調べた恩物を中心に述べ、他の恩物発表との共通点を見出しているもの】

幼少期の子どもが、石や花、人形、動物に話しかけて遊んでいる姿をよく目にします。こうした発想は物には命があり、感じる心や話を聞く力があると信じているからこそ生まれるものです。フレーベルはこのような子ども特有の豊かさを育て、子どもの自発性が発揮されるように環境を整え、関心が高まるように働きかけることを恩物を通して子どもたちに学ばせていたと思いました。 恩物を使った遊びは 1 から 2、2 から 3 へと子どもの発達に合わせて進んでいき、数が増えるごとに構造が複雑になります。 手先の細かな動きも徐々に求められるようになり、遊びを通して自発性や創造性、集中力が養われ、数学的な感性や美的感覚も磨かれていきます。球から始まり、円柱、立方体、面、線、点と展開されていき、恩物は基本となる立方体の辺の長さを 3cm であると基準にしており構成されています。すべてが 3cm に関連する寸法になっているので、いろいろな形を組み合わせることができ、遊びを展開していくことができます。色合わせや形がぴったり合うことで子どもたちは新しい発見をしていくことができます。また、自然と関わることで内と外との関係を強くし、家庭や社会といった環境の中にいる自分を強く意識する力が自然と身につき、社会性が育ちます。親との関わりも強く、自己肯定感や情緒の安定につなげていくこともできます。ですが、恩物は「遊びを通した学び」を中心に考えているため、読み書きや計算、英会話といった学習を取り入れたいときは物足りなさを感じる可能性もあります。（省略）特色のある教育を受けさせたい人には不向きかもしれないということがデメリットの 1 つだと思います。

家庭でも、フレーベルの教育を行うことができ、例えば、赤ちゃんの身体に触れながら歌う手遊びは、自分の身体にたくさんの部位があることに気付かせ、親の動作を見てまねるまねっこ遊びも、自分の身体を動かすという意識を芽生えさせます。幼児期にはボール遊びや積み木遊びを取り入れてみることで、手先の器用さや創造力、社会性の基礎などが身に付きます。 フレーベルの恩物は（省略）遊びながらよい学びの姿を獲得することができると感じました。　※傍線は筆者による。

【レポート②～恩物の追究を通してフレーベルの教育観・世界観についてまとめたもの】

私は第七恩物について調べて発表しました。第七恩物は、第一から第六恩物までの内容をまとめる感じでした。第一から第十恩物まで数字が上がる度に子どもたちが段階的に学べるようになっていました。どの恩物もシンプルに作られており子どもたち自身が考えて制作できるような玩具となっています。第一恩物とは形体の基本としてまた、精神的には理想の象徴として「球」を選んであり、子どもの最初の出会いの道具として生まれたばかりの乳児から与える道具として用意されました。だから柔らかいもので作られています。第二恩物は「球」、「円柱」、「立方体」の 3 体を選び 2 者識別をテーマにしてあり、「球」を充分に認識させ比較しながら「円柱」、「立方体」へと紹介します。そして、それぞれの球体のもつ性格を知り、新しい要素を発見させながら基本形式を認識させます。「球」は完全な形と明確に理解するようにします。「立方体」とは全て平らな面であり、まっすぐな縁をもち、新しく角があることに気付くことができます。第三から第六恩物は全て木材でできており、第二恩物で経験した「立方体」を取り出し様々な形の変化を知ります。第七恩物は面を表す色板で、形は正方形と 4 種類の三角形、円、半円の 7 種類です。色は第一恩物と同じ、赤、黄、青、緑、紫、橙の 6 種類と白と黒の 8 種類です。図案や色の組み合わせによって美的観念の高揚と調和を目的とした内容です。それぞれの形と辺を合わせて、長い、短い、どれが同じ、またはどれとどれで同じということを認識させることができます。第八恩物は直線を表す棒です。棒は 3 センチの倍数で 5 種類用意されていてほかの恩物と比べて遊ぶことができます。数遊びや図案遊びや長さの違いを生かした発展模様の遊びをすることができます。第九恩物は曲線を表す環です。物体の輪郭を把握し、印象を具体化して、自己のものとして表現する訓練ができます。第十恩物は点を表す粒で、粒によって位置の存在を知らせることと、集合して線をつくり、面を作ることを認識することができます。集合した点の移動で、形が変化することを知らせることができます。恩物はメリットが多いと思いましたが、ルールが細かい所やものが小さいものがある所がデメリットだとわたしは考えます。ルールが細すぎて子どもたちが一度に覚えるのは大変なので少しずつ保育者が教えていくのが大事だと思います。また、小さい恩物があるため、口に入れたりしないように見ておくことも必要だと考えました。（省略）　※傍線は筆者による。

【レポート③～恩物が他の恩物と関連していることを考え、すべての恩物の内容について述べたもの】

５．結果と考察について

結果については、「恩物の今日的な価値と課題」という本稿の目的に照らして学生のレポートに述べられた内容を検討し、次の視点（価値または課題・問題点）及びそれぞれの視点における内容項目（アからクまで）を抽出し、分析することにした。ただし、視点①のア「恩物の意義や目的」については、一つ一つの恩物の遊び方や注意点を中心に述べている場合、判断しにくい点が見られた。また、ウ「恩物は、今日的にも遊びを通して学ぶことができる価値ある玩具である」という項目については、どちらにも判断できる記述が多かった。そこで、定期試験（後期）で、「恩物の意義と目的」及び「今日の保育現場で活用することの是非」について設問し、その記述の内容を補足的に活用し、アとウの判断をすることにした。

【恩物を検討する視点及び分析する内容項目】
視点① 恩物の価値について
　ア　各恩物の意義や目的を述べている。
　イ　各恩物が他の恩物と関連している（関係がある）ことを述べている。
　ウ　恩物は、今日の保育（現場）においても、遊びを通して学ぶことができる「価値ある玩具」であることを述べている。
　エ　その他
視点② 恩物の課題・問題点についての記述
　オ　安全面について述べている。
　カ　特色ある保育を展開する場合の汎用性について述べている。
　キ　指導や学び（気付き）の説明・手順が多いことを問題点として挙げている。
　ク　その他

1) 結果

それぞれの視点及び項目について、記述した学生の人数（数値）は次のようになった。（表１・２参照）なお、対象人数（数値）の全体は、受講生 23 名に対してレポート提出数 22 件（未提出 1 名）である。

表１　視点① 恩物の価値について

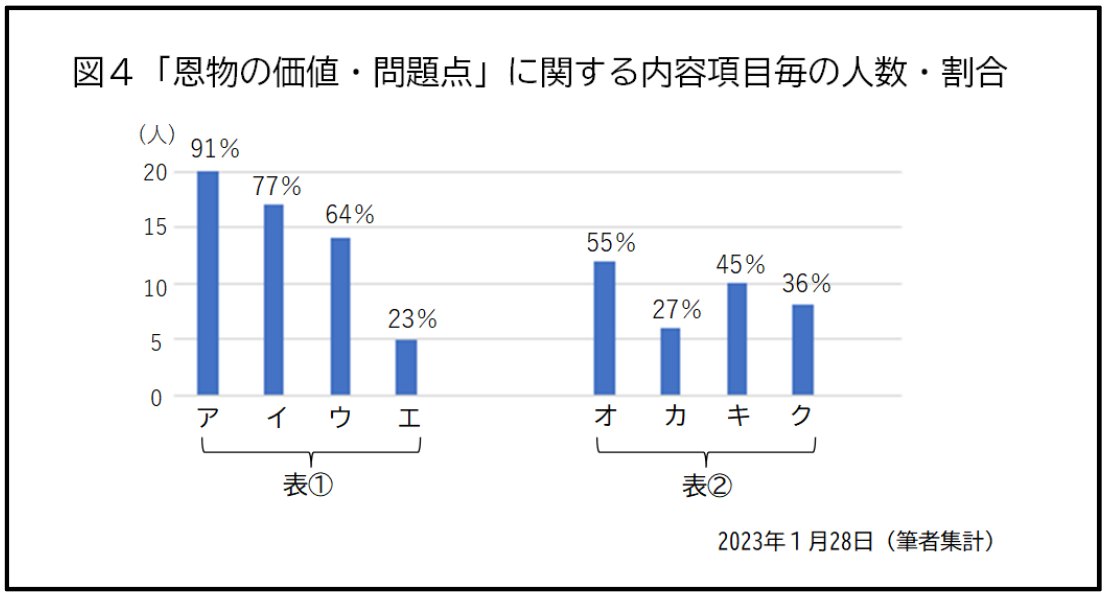
	項　目	人数
ア	各恩物の意義や目的	20
イ	各恩物が他の恩物と関連している（関係がある）	17
ウ	恩物は、今日の保育においても、遊びを通して学ぶことができる玩具である	14
エ	その他	5

表２　視点② 恩物の課題・問題点について

	項　目	人数
オ	安全面（けが、誤嚥・誤飲、アレルギー）	12
カ	特色ある保育に転移する場合の汎用性について	6
キ	指導や学びの説明・手順が多いこと	10
ク	その他	8

集計：2023 年 1 月 28 日（筆者）

表①及び表②の結果を基に、以下のグラフに表した。



2) 考察

まず、視点①と視点②における内容項目毎に考察する。

(1) 視点①：恩物の価値や可能性に関する内容について

「ア　各恩物に、活用する意義があることや、各恩物で遊ぶことから学んだり気付いたりする目的があること」を述べた学生は 22 名中 20 名（91%）に上った。文献資料のそれぞれの恩物に関するプロットに意義、目的が明記されていたことが大きいと思われる。

「イ　各恩物が他の恩物と関連している」ことを述べた学生も 17 名（77%）いた。後半の恩物を担当した学生は、すでに調査や操作の過程で、担当した恩物よりも数字の小さな恩物との関連や比較、順序を踏まえて教材研究を進めていたことが分かる。また、前掲したレポート②の記述のように、第一恩物からの順序立てた発表の内容が、自分の担当した恩物の内容と関連していることを述べていることから、他の発表内容と自分が得た内容を関係付けて理解したことが窺われる。

「ウ　恩物が今日の保育においても、遊びを通して学ぶことができる玩具である」と述べた学生は 14 名（64%）であった。前述したように、恩物活用が今日的な保育に有効であるかを文脈から読み取りにくい記述もあり、筆記試験の補足的な設問「恩物を今日の保育で活用することの是非」に対する記述回答では、「賛成」が 14 名、「反対」が６名、「賛成でも反対でもない」が２名であった。「賛成でも反対でもない」という意見は少なくとも活用に対して肯定的ではないと考え、どちらかというと「反対」の立場であると判断した。なお、レポート未提出の学生の数は数値には反映させていない。

「エ　その他」については、「恩物という玩具は、学生である自分たちや大人にとっても魅力的である」「自分たちでも楽しく遊ぶことができた」「色合いや感触がよい」等の記述が主な意見として挙げられる。

(2) 視点②：恩物の課題・問題点について

「オ　安全面」について述べた学生が 12 名（55%）いた。立方体等の角で怪我をする危険性や、投げる危険性、細かい環（第九恩物）や粒（第十恩物）の誤飲の危険性を挙げた学生が多かった。また、養護教諭の免許状を取得する受講生もおり、アレルギーの可能性を指摘する記述も見られた。

「カ　特色ある保育につなぐ汎用性」について述べた学生が６名（27%）いた。レポート②で示したような「恩物は遊びを通じた学びを中心に考えているため、読み書きや計算、英会話といった

（特徴的な）学習を取り入れたいときは物足りなさを感じる可能性」もあると述べた学生が複数名いたことは意外であった。他の文献資料や情報も活用してよいこととしていたことから、Web 上のサイト掲載されている記事を自分の内容に取り入れた可能性が考えられる。

「キ　指導や学びの説明・手順が多いこと」を述べた学生が 10 名（45%）いた。統一して活用するように促した文献資料[4]は、フレーベルの恩物論に即した指導書であり、学生がフレーベルの教育思想に触れることが大切であると考え、調査や操作体験の参考資料として提示したものであった。結果として、①ルールが細かく、理解して活用するのが難しいこと、②多くのルールを子どもに押しつける指導をしてしまうと（子どもは）自由な発想ができず、興味・関心が低下するのではないか、といった意見が主なものであった。後述することに関係するが、この意見は指導書に見られる「恩物論」に対する批判や問題点の指摘であり、恩物という玩具に対する批判とは区別する必要がある。

「ク　その他」については、８名（36%）の学生が記述した。「子どもには個人差や異なる個性があるために、すべての子どもたちに恩物が適しているとは言えないのではないか」「第三恩物など、数に限りがある場合は、数名の子どもたちが遊ぶことは難しく、複数セットの恩物を揃える必要がある」といった意見である。中には「（恩物に対する批判は）フレーベルの提唱した理論を（恩物操作の）形だけ取り入れて、本質的な理解がなされていないのではないか」や「他の教材（玩具）と組み合わせて用いるとよい」といった、恩物に対する本質的な意見や課題解決の方途を述べた意見も見られた。

3) 全体考察

恩物の価値と恩物論の課題を整理し、学生に確かな考えを獲得させることについて、学生の記述を基に、実践事例の一つとして、獲得された内容項目を示すことができた。

今回の研究の手法の課題として考えなければならないことは、「恩物は、今日の保育において、遊びを通して学ぶことができる玩具であるかどうか」を考えさせる際に、文献の統一資料として『フレーベルの恩物の理論とその実際』を必ず活用することをルールの一つに挙げたことである。本書は、現在「唯一の恩物指導書である」[5]と述べられていることから示したルールであった。学生にあらかじめ踏まえさせておくべき要点として、本書自身が 60 年近く前に恩物の活用の望ましい在り方を指向した論考であることから、本書の内容もまた批判的に検討する対象であることを理解させた上で、恩物の価値や活用の可能性、及び今日的な課題について論考すべきであったと考える。このことは、我が国の近現代における幼児教育の父とも称される倉橋惣三の、以下のような主張にも通じる。彼は、戦前からフレーベルの功績を讃えながらも、恩物については「一つひとつがいい玩具である」「なぜ、フレーベルが、あの一つひとつを、実に一つひとつの玩具として幼児のために推奨してくれなかったか」「子どもたちはみな（一つひとつの恩物が）好きである。面白く楽しむ」[6]と述べている。そして、明治期以来の形式化した恩物論を否定した。恩物を実際に扱ってみて、恩物自身のもつ価値や可能性を純粋にまた弾力的に考えた上で、文献資料や他の情報を参照し、恩物の今日的な価値と課題を追究することや、恩物を今日の保育に活用することの是非を検討していくことが大切である。また、今回は授業研究の在り方を追究する事例として恩物を取り上げたが、一つ一つの恩物の目的や操作手順等の多さに驚いた。同時に、よりよき児童の理解者であったフレーベルがなぜこのような目的や遊び方の段階的・系統的な手続きを提唱したのか、改めて問い直す必要がある[7]。

６．おわりに

今回、授業における恩物の教材研究を通して、次のような成果と課題を得ることができた。

恩物の今日的な価値や可能性、課題や問題を学生自身が理解すること及びその探究活動を実現することはできたと考える。しかし、本稿の主タイトルに掲げた「主体的」な探究活動（student-centered research activity）が実現できたかどうかは疑問である。学生が主体的であったかどうかは、例えば、「主体性」を測るために、積極的、能動的な側面として「熱心に操作したり調べたりして追究する姿」「私は第〇恩物を調べたい（選択による意思表示）」「もっと調べたい（追究意欲）」等を見取ることができれば、「学生は主体的に探究した」と言及できるに違いない。しかし、学生は真面目に、グループのメンバーと協力して活動したが、「熱中」や「旺盛なディスカッション」といった学生自身の姿であったと断言することはできない。レポートやワークシートの記述にそれらの意思や態度面の言及を求めたが、主体性を示す言葉を抽出することはできなかった。本稿で目指す授業は、当然の帰結としてアクティブ・ラーニングの実現であるが、その条件は「主体的」「対話的」「学びの深まり（深化）」という３つが成立することに依る。今後の課題としたい。

【註】

1) 最近では、島田和幸「明治期における我が国の幼児教育カリキュラム―恩物を使った実践を中心に―」（大濠教育研究所研究紀要 2021 年度版、2021 年、pp.33-42）、野尻美枝「20 世紀初期における恩物積木の実践」（保育学研究第 58 巻 2-3 号、pp.19-30）の論考等が認められる。
2) 玉成高等保育学校幼児保育研究会編『フレーベルの恩物の理論とその実際』（フレーベル館、1964 年）は、「第一恩物 六球」（制作・販売元：フレーベル館）に添付されている解説に「日本で唯一の恩物のための指導書」であると述べられている。
3) 写真３「第九恩物の模様遊び」は、前掲書『フレーベルの恩物の理論とその実際』（p.281）に「中心模様」（四つの中心）として掲載されているものを学生が再現しているものである。
4) 註(2)に同じ。
5) 倉橋惣三が著した『フレーベル』は、岩波書店から 1938 年に出版されている。本稿では、『倉橋惣三選集 第一巻』（フレーベル館、1965 年）に所収されたものの p.375 から引用した。
6) 同上書『フレーベル』（p.388）において、倉橋はフレーベルの恩物論に対して「疑問となるのは、フレーベルの如き児童の理解者が、何故にかくの如き論理主義に傾き、一切を抽象理法において理屈づけたかということである。」と疑問視し、その理由を二点挙げている。一つ目は、フレーベルが幼児（期）から瞑想癖に禍せられ、さらに当時の哲学的思想によって強化されたこと、二つ目は、フレーベルが鉱物学の学徒として結晶の神秘に傾倒したことを挙げている。
7) 前掲書『フレーベルの恩物の理論とその実際』。

【参考文献】

玉成高等保育学校幼児保育研究会編『フレーベルの恩物の理論とその実際』フレーベル館、1964 年。
倉橋惣三『倉橋惣三選集 第一巻』フレーベル館、1965 年。